



昭和30年代の収穫期の田園風景



収穫の喜びをかみ締めて稲刈り



活気に満ちた米だし作業

五月十七日、古川地域志田小学校近くにある飯川熊野神社の御斎田でお田植え祭りが行われました。雨の降る天気にも「米づくりにするのは、雨は恵みをもたらす喜ばしい天気」と、集まった地域の人たちは、昔ながらの手植えで手際よく約一反歩に苗を植えました。平成五年の大冷害。米の収量の大幅な落ち込みに打ちひしがれていたとき、米作りに取り組む気力を取り戻そう、もう一度原点に戻って、米作りの喜びを再認識しようという機運が高まり、お田植え祭りが始まりました。

江戸時代、伊達藩の米の生産高は天下第一と伝えられています。所領は六十二万石でしたが、実高は百万石、一説によれば二百万石を超えていたとさえいわれています。

米の収量を上げるために米づくりに携わる人々が心血をそそいできたのに、米の消費量は年々減少しています。一人が一年間に食べる量で見ると、昭和三十五年には約百二十キログラムでしたが、平成十六年には約六十二キログラムと、ほぼ半減しています。

そこで、日本全体で必要な分だけ米を生産するため、稲を作付けする面積を調整する「生産調整」が行われてきました。いわゆる減反政策です。農家の収入を支えてきた米価も、生産が消費を上回る米余り状況が続く、長期的な下落傾向にあります。さらに、農村地域における人口減少により地域活力の低下が懸念されています。

農林水産統計によれば、わが国の農業就業人口は毎年十数万人ずつ減り続け、平成二十二年で二百九十八万人です。このうち約半数の百四十万人を七十歳以上の高齢者が占め、二十年後を担う三十九歳以下は三十五万人しかない状況です。

食料自給率の低下、後継者不足、耕作放棄地の増加、農家人口の長期減少、日本人の米食離れ、輸入農産物の増加による競争力低下など、日本の農業は深刻な課題に直面しています。

いにしえより受け継いできた農地を耕し農業を続けていくことは、私たちの食、生命を守ることもあります。こうした厳しい状況の中でも、時代を見据えた発想で取り組んでいる農業経営者が明日の農業を拓いています。

特集 明日を拓く農業



古川地域の飯川熊野神社の御斎田でお田植え祭り